The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「聞こゆ」に後接する過去の助動詞 : 覚一本『平家物語」の場合
Author(s)	小林, 賢章
Citation	語文. 1990, 53-54, p. 97-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68811
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「聞こゆ」に後接する過去の助動詞

——覚一本『平家物語』の場合——

小林賢章

一　はじめに

覚一本『平家物語』[1]（以下『覚一本』と略称）中の「聞こゆ」に後接する過去の助動詞「き」と「けり」の分布から、本稿は、『覚一本』編集の一端と『覚一本』の語りの時間を考えようとするものである。

その前提として、『覚一本』中での、「聞こゆ」の意味を確認しておく。「聞こゆ」の意味用法については、川岸敬子に「『平家物語』の「きこゆ」について」という論文[2]があり、それに詳述されている。そのうち、意味については、

①音声が耳に入る。……一六例

②世に知られる。噂される。……二三一例

③聞いて、これこれだと受け取られる。……五例

と分類されるとしている。つまり、まず、『平家物語』の中には、謙譲語としての「聞こゆ」は存在しないことの確認がなされ、次に、①から③まで、それぞれ具体的な用例を示して、意味分類できることが述べられている。そうした細かな分類はそれなりに意味を有するものであるのは論をまたないが、本稿ではあえて、そうした詳しい意味分類をとらず、むしろ、①から③に共通する要素を捉えて、意味用法と考えてみる。この立場に立つと、①から③まで、いずれの場合にしても、「聞こゆ」は、「耳にする」ということを述べているのであり、「聞く」との関係を考慮すると、「耳にする」内容が自己の意識に関わらず、耳に入ってくることになる。結論的には、本稿では、『覚一本』においては、「聞こゆ」が「事態、あるいは、事件が、誰かの耳に入ってくる」という意味で使用されていることを確認して論を先に進めることにする。

二　『保元物語』『平治物語』の「聞こゆ」の用例

ここで、少し視点を変えて、『覚一本』と同じ軍記物語に属する『保元物語』[3]『平治物語』[4]の「聞こゆ」の用例を考える。

『保元物語』では四一例が確認でき、『平治物語』では一六例が確認できる。『覚一本』とこの『保元物語』『平治物語』とではその分量的な問題もあるので単純な比較は、難しいが、『平治物語』の方でやや用例数が少く、『保元物語』の方は用例数そのものでは、『覚一本』に比して、さして遜色ないと言えよう。

次に『保元物語』『平治物語』の「聞こゆ」の連用形だけを取り出し、それに後接する過去の助動詞を見てみる。問題を簡単にする為に、「聞こえたりけれ」のように、過去の助動詞が直接付かない用例は、これを除外し、「聞こえし」「聞こえけり」[5]のように直接付く場合だけを問題にする。もちろん、「し」「けり」の活用形は問題としない。

『保元物語』の場合　「し」―十九例　「けり」―十四例
『平治物語』の場合　「し」―二例　「けり」―五例

『平治物語』方は用例数も少なく確定的なことは言えないが、『保元物語』の方から考えると、「聞こゆ」と言う動詞には必ずしも、過去の助動詞として「し」または「けり」のどちらかを要求することはないといえよう。

つまり、当然のことだが、過去の助動詞としては、「し」と「けり」が、場合場合によって使い分けられるのである。それは軍記物語という分野でも同じだということである。

三　『覚一本』の「聞こゆ」に直接後接する過去の助動詞

ここでも、問題を簡単にするために、『保元物語』『平治物語』の調査でも行ったように、『覚一本』中の「聞こゆ」に直接後接する過去の助動詞を考える。つまり、「聞こえさせ給ひし」や「聞こえ候ひき」といった、過去の助動詞が聞こえに直接接続しない表現は除外し、「聞こゆ」の語形は連用形キコエ[5]に限定され、その直ぐ後に「き」、ないし、「けり」が後接する場合だけを問題にする。

『平家物語総索引』[6]により、その用例数を以下に示す。

「覚一本」中の「聞こゆ」に直接後接する過去の助動詞キとケリの比率。

巻数	ケリ	キ
一	0	15
二	3	12
三	0	20
四	1	13
五	1	9
六	6	17
七	2	12
八	1	15
九	4	25
十	1	10
十一	1	9
十二	1	11
灌頂	2	2
合計	23	172

総数一九五例のうち約八八パーセントが、「き」の接続であり、圧倒的に「き」の接続が多いことが知られる。さらに、『覚一本』における「き」と「けり」の出現比率を見てみると、概ね、「き」が1にたいして、「けり」が3の比率であることは索引の当該箇所を見れば確認できるから、「聞こゆ」に直接後接する過去の助動詞としては、「けり」に比べて、「き」が圧倒的に多いということが確認できる。さらに、先に見たように、『保元物語』『平治物語』といった他の軍記物語と比べてもその出現の数値は意外な数値と言えよう。

つまり、『覚一本』において「聞こゆ」の後に過去の助動詞が付

く時、圧倒的に「き」が使用されるという現象は、『覚一本』の一特徴であると言える。

四　『覚一本』中での「聞こゆ」の用法

次に、過去の助動詞が直接つく「聞こゆ」はどのように使われているかをみておく。

(1)平家か様に繁盛せられけるも、熊野権現の御利生とぞきこえし。〔上八九〕

(2)されば此大将をば、君も臣も御感ありけるとぞきこえし。〔上一二〇〕

(1)は事件の前提として語られ、(2)は事件の結果に対し、語られている。もちろん、事件の経過の中で使われることもあるし、単に、

(3)「入道相国の心に天魔入かはって、腹をすへかね給へり」と聞えしかば、〔上二五九〕

のように、話を聞いたと使われることもある。これらの用例に共通なことは、

(4)「まことや、これには備前のこじまにと聞えしが、（中略）御をとづれをもきかばや」とこその給ひけれ。〔上一八七〕

(5)「西王母ときこえし人、（中略）うき世をいとひ、まことの道に入なん」とて、〔下二六八〕

の二例を除くと、全て地の文の中での用例であるという点である。さきに、本稿の中で、『覚一本』での「聞こゆ」の意味は、「事態、あるいは、事件が、誰かの耳に入ってくる」の意であることを述べた。とすれば、(4)(5)の二例を除き、過去の助動詞「き」が「聞こゆ」に直接付く場合の「聞こゆ」の主語は、作者となる。過去の助動詞が「聞こゆ」に直接付くとそこに作者が顔を出すと言ってもよい。このばあいにおいては、「事態、あるいは、事件が、誰かの耳に入ってくる」というのを、さらに一歩進めて、「事態、あるいは、事件が、作者の耳に入ってくる」としてもよさそうである。さらに、『平家物語』は語りという形で享受されたということを考えれば、平家の語りの場では、この「作者」を「平家を語る盲僧」と言い換えてもよいことになる。さらに、いわゆる、過去回想の助動詞ではなく、直接過去の助動詞「き」が選択の中で、判断され使用されることを合わせ考えると、「聞こえし」を訳すのに、「噂が立った」という一般論的表現ではなく、「そういう噂を私（盲僧）は聞きました」と言った、盲僧個人に関わる訳の方が、より的確だということができる。

五　『覚一本』の語りの時間

ここまで、『覚一本』において、「聞こゆ」に後接する過去の助動詞は「き」が圧倒的に多いこと、そして、その場合「聞こゆ」の主語は、平家を語る盲僧自身になることを述べてきた。

前節で、「そういう噂を私（盲僧）は聞きました」と言った訳の方が、『覚一本』においては、適当であるとした。『平家物語』を語る盲僧は自らの直接体験を語っていることを言っているのである。とすれば、「聞こゆ」（厳密には、過去の助動詞として「き」が直接付く場合）の使用されている部分ばかりでなく、用例(3)でみたような会話部分はもちろん、用例(1)や(2)でみた、「聞こゆ」を含む文

以外のところ、語りの大部分も直接過去として、語っているとしてよかろう。

ここでもう一度、用例を見てみる。巻七「還亡」の話は、『平家物語』の時代を遠く去る天平時代の話である。この話の進行の中で、上巻八三頁、3・5・7の各行で、「聞えし」と三度繰り返して、「聞こゆ」が使用されている。『平家物語』の成立当初においては、源平の争乱を直接見聞した老盲僧がおり、それを語ることができたかもしれない、しかし、その成立当初においても（その後はもちろんだが）、天平時代を生きた人は存在するわけがない。それを直接過去で語っているのである。ここで、『大鏡』など鏡物のたいそう長生きした老人が歴史をかたる伝統を思い起こすのは、不当のことは思われない。『平家物語』が、源平の争乱から大きく隔たってからも、現に、この『覚一本』の成立ごろに、源平の争乱を直接見聞した人は存在するわけもないが、『平家物語』の語りは直接体験した過去として語られているのである。そこにある時間はこんにちの歴史を語る時間とは全く別のものと言えよう。

六　「けり」が後接する「聞こゆ」の性格

それでは、「けり」の付けられた「聞こゆ」の性格を見ておく、

(6)「あはれ、これは日来のあらまし事のもれきこえけるこそ。〔上一五六〕
（以下略）」

は、会話文中の用例である。会話の中では、もちろん、主語が盲僧であるわけはなく、先に述べてきた、「き」使用の原則は適用されない。

次に、

(7)亀山のあたりちかく、松の一むらある方に、かすかに琴ぞきこえける。〔上三九七〕

これは、有名な「小督」の一説である。この場面は、小督を訪ねる仲国がその主人公として語られる話であり、キコエの主語は仲国と考えねばならないであろう。其の主語は、語り手ではないことが指摘できる。

つぎに、少し視点を変えて、屋代本[8]との対応を調べてみる。『覚一本』の

(8)山門に又聞えけるは、平家山せめんとて、数百騎の勢を卒して登山すと聞えしかば、〔上四二九〕
(9)山も河もたゞ一度にくづるゝとこそ聞えけれ。〔下七三〕
(10)源氏の方には十郎蔵人行家、数千騎で宇治橋より入とも聞えけり。〔下九三〕

の部分は、それぞれ、屋代本の

(11)山門大衆　法王ヲ取進テ・可レ追二討平家ニト聞ヘシカハ〔中二六七〕
(12)山モ川モ・只一度ニ崩ルヽカトソ覚タル〔中二八三〕
(13)サル程ニ十郎蔵人一万騎ニテ・宇治ヨリ入ト云〔中二九七〕

の部分に対応している。当該部分はほとんど同じ表現であるのに、肝心の『覚一本』で「聞こゆ」とある部分に対応する屋代本の当該部分が別の表現になっていることがわかる。これは二三例中一二例について言える。

また、「聞こゆ」に過去の助動詞として、「けり」が連続して使用される上巻四〇六頁11行目から、四〇七頁8行目までは、当該部

分が屋代本に存在しない点は注目されてよい。

つまり、過去の助動詞として「けり」が使用される箇所は、主語が語り手とは考えにくい場所か、当該箇所が屋代本では別表現をとっているか、相当する部分がない所がほとんどだといえる。

もちろん、以上のような処理をしてもやはり例外となるものは少数存在するが、過去の助動詞として「けり」が後接する「聞こゆ」はなんらかの問題点が指摘できよう。

ここで推測を逞しくするなら、『覚一本』が語り本として大きな編集が行われた時点では、主語が語り手である「聞こゆ」に過去の助動詞が後接する場合は「き」をつけることが、その編集の中で行われたが、その後、増補、或いは、小さな変更がなされた部分に、「聞こゆ」に過去の助動詞として「けり」が後接する文章が補入されたとは、いえないだろうか。

七　最後に

ここに、本稿での結論を、再述するならば、(1)『覚一本』において、大きな編集が行われた時点では、「聞こゆ」に後接する助動詞として「き」が専用された。（主語が、語り手でない二例は除く）(2)それも、盲目の人が語る点を考慮して、「聞こゆ」の場合に、直接過去が使用せられたと言える。(3)従って、『覚一本』の語りの時間は、直接過去を語る時間として設定されており、(4)それは、あるいは盲目ゆえに、超人的能力がありと思われたことを前提として、実際の時間を越えて語られ、(5)更に、「聞こゆ」に過去の助動詞として「けり」が付く場合は、主語が語り手でない場合を除くと先の大きな編集のあと行われたであろう、小さな変更の中で行われたとまとめることができよう。

〔注〕

(1) 高木市之助ほか『日本古典文学大系32・33　平家物語上・下』（昭和34年　岩波書店刊）

(2) 川岸敬子「『平家物語』の「きこゆ」について」（『文学・語学』第111号　昭和61年12月）

(3) 坂詰力治・見野久幸『保元物語総索引』（昭和56年　武蔵野書院刊）による。底本は古典大系本。

(4) 坂詰力治・見野久幸『平治物語総索引』（昭和56年　武蔵野書院刊）による。底本は古典大系本。

(5) 本稿では活用のある単語を表記するのに、「聞こゆ」のように、鉤カッコを用いた場合は、単語の総体を示し、キコユのように、仮名表記した場合は、各活用形（この場合終止形）としての用法を示すものとする。

(6) 笠栗治編『平家物語総索引』（昭和48年4月）による。

(7) 「　」の中は引用文献の上中下巻の別とその頁数を示す。振り仮名は全て省略に従った。

(8) 佐藤謙三・春田宣『屋代本平家物語上巻・中巻・下巻』（昭和42・45・48年楓社刊）

――同志社女子大学助教授――